

(シラバスNo.13)

科目名	ファシリテーション特論	科目コード	(2021年カリキュラム) / (2024年カリキュラム) 21P-A2/24P-C1	
		科目群名	(2021年カリキュラム) 専門科目 (共通領域)	
			(2024年カリキュラム) 専門科目 (C群)	
	Advanced Seminar on Facilitation	必修/選択	(2021年カリキュラム) / (2024年カリキュラム) 選択/選択	
担当教員	三田地 真実	教職	—	
		単位数	2	

【授業概要】

教育界のみならず、現代社会における複雑な問題を解決するためには、多様な立場（多職種、多機関）の人々がチームを組んで、あるいは話し合いの場を持って臨むことは必須の事態であり、様々な領域において「連携・協働」の重要性が認識されている。しかし、実際には、意味ある話し合いの場が展開できずに苦慮している場合も少なくない。本特論では、今後の教育課題のみならず、広く問題解決のために人が集って話し合いを行っていくためには必須の「ファシリテーション」について深く探求し、実践できることを狙いとしている。

【授業の到達目標】

本特論を受講した後に習得できる具体的な行動目標は以下の通り：

- ① 場づくりの技法としてのファシリテーションについて、そもそもの意義が理解できる。
- ② 話し合いの基礎となる、コミュニケーションの基本を体得できる。
- ③ 場づくりの基本的な技法を獲得できる。

実際にワークショップ・ワークショップ型の話し合いを企画・実施できる。

【授業の形態】

メディア授業の実施【あり】

<授業の特徴>（毎回実施に◎、適宜実施に○を付けてください）

形態	実施	具体的に実施すること
講義	◎	ファシリテーションの理論と技法についての解説
グループワーク・質疑	◎	毎回のテーマについて受講生同士での対話必須
演習	◎	ファシリテーションの技術習得のための演習
プレゼンテーション	◎	ファシリテーションの技術としてのコミュニケーション力を向上するためのプレゼンテーション課題
制作		
その他（教育実践）	○	学修した内容を実際の現場で活用し、観察、記録、介入、省察を行う。

【授業計画】

回	内容
1	オリエンテーション（共生社会の構築とファシリテーションの重要性）
2	ファシリテーションとは何か（場づくりの技法とその意義）
3	ファシリテーター（ファシリテーションを行う人）のマインドについて
4	ファシリテーションの3つの段階（事前準備・本番・フォローアップ）の概要
5	ファシリテーションを活かすためのコミュニケーション基礎（非言語的な側面）
6	ファシリテーションを活かすためのコミュニケーション基礎（言語的な側面）
7	ファシリテーション事前準備の段階（空間のデザイン、参加者の概要など）
8	ファシリテーション事前準備の段階（プログラムデザインを中心に）

9	ファシリテーション本番の段階（アイスブレイク、グループワークのノウハウなど）
10	ファシリテーション・フォローアップの段階（PDCA サイクルなど）
11	ワークショップ・プレゼンテーション（受講生によるプレゼンテーション） －事前準備に焦点を当てて－
12	ワークショップ・プレゼンテーションのふり返し（事前準備に焦点を当てて）
13	ワークショップ・プレゼンテーション（受講生によるプレゼンテーション） －本番とフォローアップに焦点を当てて－
14	ワークショップ・プレゼンテーションのふり返し（本番とフォローアップに焦点を当てて）
15	授業のまとめ（授業自体のフィードバック・ワークショップ）
試験	
<p>【履修上にあたっての準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が関わっている会議・授業・研修など複数の人が集って何かを為そうとしている「場」で気になるものがあれば列挙し、それはなぜかについて考えておくこと。</li> <li>・その後に、テキストを精読しておくこと。</li> <li>・初回に持参するもの：自分のノート PC（イヤホンも必要）</li> </ul>	
<p>【授業外学修（予習・復習）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予習：次回の授業で学修する内容についてテキストを精読し、レポートにまとめること。</li> <li>・復習：前回の授業で学修した内容について、教育実践の現場ではどのように適用できるかについてレポートにまとめること。</li> </ul>	
<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「授業内で課すレポート評価」（50%） 学修したファシリテーションの理論と技法が正確に理解でき、教育実践に結び付いているか、が評価のポイント</li> <li>・「科目修得試験」（50%）の割合で総合して評価する。 実際に、ファシリテーションの理論と技法に基づく介入を行い、省察ができていないか、が評価のポイント</li> </ul>	
<p>【教科書】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三田地真実(2013). 『ファシリテーター行動指南書』, ナカニシヤ出版 (ISBN : 978-4779506697)</li> <li>・中野民夫・三田地真実 (編著) (2016). 『ファシリテーションで大学が変わる-アクティブ・ラーニングにいのちを吹き込むには【大学編】』, ナカニシヤ出版 (ISBN : 978-4779510571)</li> </ul>	
<p>【参考図書】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Justice, T.(2012). <i>The Facilitator's Fieldbook. (3<sup>rd</sup> Ed.)</i> , American Management Association: New York. (ISBN : 978-0814420089)</li> <li>・亀田達也(1997). 『合議の知を求めて～グループの意思決定』, 共立出版 (ISBN : 9784320028531)</li> <li>・三田地真実(2007). 『特別支援教育連携づくりファシリテーション』, 金子書房 (ISBN : 978-4760828258)</li> </ul>	